

3つの起源から島之内をご紹介

御津、島之内、心齋橋筋という3つの起源を持つ島之内エリアを読み解く

松原から若者文化の街へ

御津

景勝地、職人のまち、若者文化のまちと変遷し、歴史が堆積。流行の発信地は、しっかりしたまちづくりで若者文化を育みつづけています。

大坂の目印だった白砂青松の景勝地「みつの松原」

「朝なごに 真かじこぎ出て 見つゝ来し
みつの松原 浪越し見ゆ」
これは万葉集に収められている歌の1つ。白砂青松の海岸「みつの松原」を詠んだものです。

古代にはそこまで海が広がり、みつの松原を目印に遣隋使・遣唐使などの船が行き交っていたのです。
大坂平野の奥深くまで海だった頃、河川からの土砂により、小さな島々がたくさんできました。これらの島々は「なにわ八十島」と呼ばれ、今でも「中ノ島」や「望島」など、「島」がつく地名として残っています。

水運が生んだ「炭屋町」

今、御津界隈で有名なスポットといえば、御津公園。通称三角公園で、地名は西心齋橋。地名と場所のイメージが合致する人も多いでしょう。
でも、かつて、このあたりの地名は、炭屋町といいました。これは、水都大阪らしい地名で、阪神高速1号線が整備されるまであった西横堀川に関係しています。このあたりには、銅の精錬に川の水を使うと便利だったので銅吹所ができ、水とともに必要だった炭を売る炭屋が集まったので、炭屋町という地名になったとのこと。

アメリカ村の文化・流行



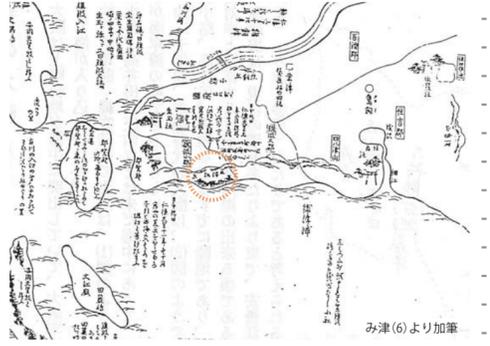
歓楽街に隣接した御津界隈に若いアーティストやクリエイターが集まったのがアメリカ村と呼ばれるようになった地域のはじまり。ガレージや倉庫でアメリカの輸入品が売られていました。

昭和45（1970）年頃、朝までコーヒーが飲める店として喫茶店LOOPができ、サーファーフッションやアメリカ西海岸イメージの店が増加。その後、日本初の中古レコード専門店「キングコング」がオープン。1980年代には三角公園がブランコなどを備えた公園から、ステージや客席のあるイベント開催が可能な公園に整備され、本格的なクラブも進出。1990年代も出店が続き、アメリカ村のランドマーク「BIG STEP」もこの頃できた、というところが、アメリカ村の発展の歴史。

若手アーティストがペインティングした人型の街路灯

割れ窓理論

アメリカ村では、まちの風紀を守る防犯活動に熱心なことで知られています。そこで用いられているのが、環境や状況が犯罪を誘発するという「割れ窓理論」という考え方。
これは、当時治安の悪かったニューヨークを観光都市として再生させたジュリアー二元市長が用いたことで有名。路上に車が1台あり、その窓ガラスが1枚割れていると、車全体がボロボロにされていく、という考え方です。アメリカ村では、1,000ヶ所以上もの落書きがありました。地域やボランティアの方々による消去活動の結果、多くの落書きが姿を消しました。同時に防犯カメラを設置するなど、アメリカ村の環境は地域の手で大幅に改善されています。



み津(6)より加筆

御津は重要な港に由来。エピソードはいろいろ

御津という地名にはいくつかの由来があります。その一つは、苦く悲しいエピソード。仁徳天皇の后（きさき）が、船で熊野野に行ったお土産として御綱柏を天皇のために持ち帰ったのですが、その間に天皇は八田皇女と会ったことが判明。怒った后が御綱柏を海に投げ込んだということでそこが御津とよばれるようになったとのこと。
身分の高い人が利用された港、「御」の「津」という意味で御津の名前が生まれたともいわれています。どちらの由来も海にちなんだエピソードで、今では想像し難いものです。

第1回大阪府会の議場として使われた三津寺

御津筋に面した三津寺は、繁華街にあって存在感抜群。この寺は、明治12（1879）年の第1回大阪府会の議場として本堂が使われた歴史的な場所でもあります。
実はこの大阪府会、通称は「豆腐会議」だったとか。なぜなら、議員の中には、近くの豆腐屋に立ち寄るメンバーがいたため、「『大阪府会』じゃなく、『豆腐会（府会）議』やないか!」と言われたからとか。

若者を育てる街、アメリカ村

若者の集まるアメリカ村の魅力は、若者を育ててきたこと。アメリカ村に集まった若者の中に、芸人やアーティストになり、現在も活躍中の人があります。その中心にいたのは、アメリカ村のママこと、故日隈萬里子さん。
日隈さんが経営する喫茶店LOOPで働いていた間寛平さんは芸人に、デザイナーとして世界で活躍する間宮吉彦さんも日隈さんに影響を受けた人。他にも多くの人が日隈さんに育てられたとのこと。



アメリカ村の会 森本さん

生徒、学生の集う拠点から若者の集う拠点に

平成5（1993）年の「BIG STEP」建設は、このまちの大きな変化でした。
なぜなら、この複合商業施設のあった場所は、戦前は御津小学校、戦中・戦争直後は御津女子商業学校、その後は長く南中学校本校だったからです。ビッグステップは、日本初のカーブするエスカレーターが登場したことで話題になりました。また、学校跡地を商業施設に転用する近年では各地に見られる手法の先駆けとなった、まちづくり事例です。

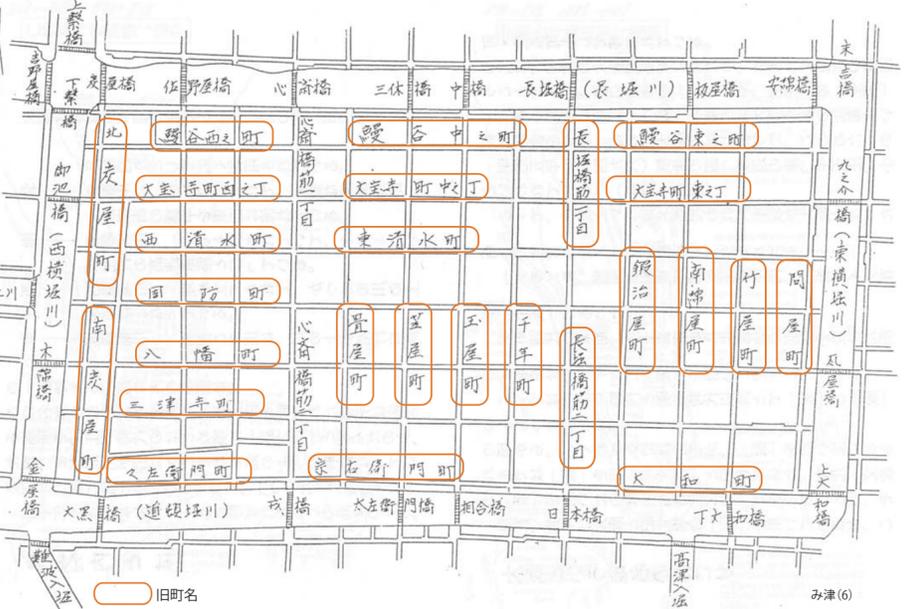


時代とともに変遷してきた地に建つビッグステップ

職人町から発展した造成地

島之内

広さは今の大阪城公園と同じくらい。江戸時代に造成され、特徴的な職人まちが隣り合う地として発展。



旧町名

町の歴史を伝えた旧町名

畳屋町、鍛冶屋町、鋳屋町、笠屋町、雪駄屋町、玉屋町、塗師屋町、木挽町、紺屋町、竹屋町、炭屋町、米屋町、灰屋町、木綿町、問屋町……。江戸時代に職人町だったことを示す由緒ある旧町名が島之内にはたくさんありました。
こうした町の通り名は「シ（心齋橋筋）・タ（畳屋町筋）・カ（笠屋町筋）・サ（堺筋）・セ（千年町筋）・タ（玉屋町筋）」という覚え歌で覚えたそうです。



道頓堀川より宗右衛門町を望む 長崎大学付属図書館蔵

大坂の歴史の舞台とともに移転してきた法案寺

5〜6世紀に現在の大阪城付近に聖徳太子によって創建された法案寺。天正11（1583）年、豊臣秀吉が大坂城を建設する際、現在の生國魂神社の場所へ強制移転。さらに、明治はじめの廃仏毀釈で寺領が失われ、その後、現在の地に再建復興されました。
廃仏毀釈のときは、聖観音菩薩立像（約850年前の制作）と歓喜天を立達栄和尚が運び出して守ったとのこと。
大阪城の南にある「法円坂」という地名は、その坂の側にあった「法案寺」がなまったことが起源との説があるとは、十川さんのお話し。



法案寺住職の十川さんよりお話をうかがう

島の中だから島之内

元和8（1622）年、すでに開削されていた東西横堀川、道頓堀川に加えて、長堀川が開削されたことで四方が堀川に囲まれた島状の土地が誕生。それが「島之内」。東西1400m、南北700mの長方形の地には、時代のニーズに応え、水運を活かして手工業者が多数居住する地域として発展。
現在では島になっていないため、目で「島之内」を実感することは難しくなりました。北の長堀川は昭和39（1964）年、西の西横堀川は昭和46（1971）年に埋め立てられました。

通り道から日本を代表する場に

心齋橋筋

日本有数の繁華街で、今や世界中の観光客が買い物をする通り。それでも昔と変わらないのは、人がこころを通わせる場であること。

船場の旦那衆の買い物の町「心齋橋筋」

江戸時代、船場の旦那衆が五座に向かう際に通ったのが心齋橋筋。通りには呉服屋がたくさんあって、旦那衆の買い物の場でした。
格のある「心齋橋」のたもとには、髪結い処、散髪屋、風呂屋などがあり、身なりを整えてから橋を渡ったとのこと。

東の「銀ブラ」、西の「心ぶら」

心齋橋筋は、幕末から明治にかけて小売店舗が急増。昭和に入る頃には、東京を上回る日本一の人口を誇り、文化・芸術・産業の中心地だった大坂時代の繁栄を背景に、呉服商を起源とする大丸やそごうが百貨店を開業し、ショッピングストリートとしてますます充実。その結果、通り道だった心齋橋筋は、買い物のために人が南北を何度も往復する集客拠点になりました。東京・銀座をブラブラ歩くのを「銀ブラ」と言うのに対して心齋橋筋では「心ぶら」という言葉が生まれました。
心齋橋筋は老舗が長くつづいています。大丸やそごうなどの大店の他、増田漆器店、伊藤仁壽堂、芝蔴香など。ちなみに、そごうのマークは糸巻きにちなんだ家紋で、呉服屋からスタートしたことがよくわかります。



「摂津名所図会」 大阪市中央図書館所蔵

売る側と買う側のところがつながる商店街



心齋橋と心齋橋筋の文化を本にまとめた中尾さん

「心齋橋筋の『心』も『齋』も『こころ』という意味があり、売る側と買う側のところがつながるのが心齋橋筋商店街」と言う、心齋橋筋商店街で古書店を営む中尾さん。
江戸時代は、旦那衆をはじめとして丁稚さん、番頭さんなどたくさんのお客さんがいましたが、最近では外国人観光客も大切なお客さん。心齋橋魂で、世界の人びとと心がつながります。

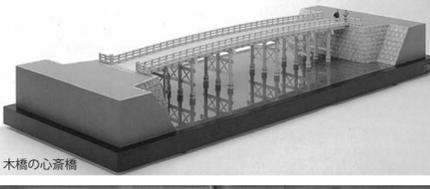
戦災後の復興を支えた心齋橋筋

戦争で心齋橋筋は焼け野原になりましたが、終戦翌日から、ゴザのうえで焼け残った商品が売られていたとのこと。戦後は、戦時中に食料難のために呉服を手放して食料を手に入れた人びとが再び呉服を買い求めたので、呉服屋が増加し、婦人服を中心とする洋服屋も増え、戦後のおしゃれを支えました。
商店街は今、店舗が230軒にのぼり、1日平均7〜10万人の出入りがあります。「大雨の日には、御堂筋からアーケードのある心齋橋筋に人が流れ、一気に30万人が押し寄せ、店主が交通整理にあたってたいへんだ」とは、敷内さんのお話し。



時計店を営む敷内さん

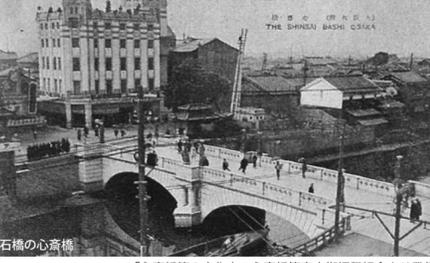
富の象徴「心齋橋」



木橋の心齋橋



鉄橋の心齋橋



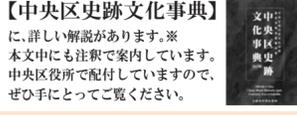
「心齋橋筋の文化史」心齋橋筋商店街振興組合より発行

心齋橋は、皇居の二重橋に似ていたので、拜みに来る人もいたというエピソードが残るぐらい立派な構造物でした。驚かされるのが、それが、心齋橋は住民の資金で架けられた町橋だったということ。60年に一度架け替えられ、時代とともに木橋、鉄橋、石橋と変遷し、絵はがきなどに描かれました。
「橋」と「くいだおれ」という言葉には関係があるんですよ！食にお金をかけすぎて財産を失う『食い倒れ』という意味と、洪水で橋を支える杭が倒れて流れてしまう橋を架け直すために資金を出さなければならず、それで財産を失う『杭倒れ』です」と、自ら編集に関わった本を手に、中尾さんからは、心齋橋の歴史を軽妙にお話ししました。

多様なまちが集まった島之内のこれから

島之内でかつての地名が残る唯一のまち、宗右衛門町。往事には600以上の店舗が軒を連ね、日本最大級の歓楽街として知られ、昭和47（1972）年には、「宗右衛門町ブルース」が大ヒットを記録するほど有名になりました。
ミナミの強みは、この宗右衛門町をはじめ、九郎衛門町、櫛町、難波新地、坂町の「南地五花街」と呼ばれたまちのように、個性豊かなまちが集まっていたこと。今、これら、ミナミのそれぞれの個性を活かしたまちづくりが盛んに取り組まれています。
宗右衛門町では、「食と酒、川のある街・宗右衛門町」とのキャッチフレーズのもと、電線の地中化や「石畳の道」の復活などのハード整備などに加え、格調高い魅力的なまちづくりをめざして建物を作る際のルール化なども盛り込んだ、まちのルールが定められています。これは、地区計画という都市計画法にもとづく制度で、地域の要望のもと、大阪府が定めたしくみで、全国的にも先進的なまちづくりの取組みです。
心齋橋筋は江戸時代より続く歴史や文化から、品格あるまちが形成され、多くの人に愛されてきた日本を代表する通り。近年では、大丸北館に若い女性向けブランドが揃うフロアが展開され、また、心齋橋エリアには大手ブランドの旗艦店の相次ぐ出店など、世界的にも注目されるファッションのまちとして盛り上がりを見せています。そんな中、心齋橋筋の歴史や文化を未来へ継承するために立ち上がったのが、心齋橋筋まちづくり推進協議会。「心ぶら」するまち（したいまち）をキャッチフレーズとし、心齋橋らしい街並み形成に向けた取組みを進めています。
また、気持ちの良い商店街を目指し、笑顔でもてなすキャンペーンのひとつとして、心齋橋クリーン大作戦という清掃活動を10年以上前から実施しています。
違法行為を防ぐ運動においては、警察や行政と連携し、ミナミ全体での取組みが定期的に行われています。

宗右衛門町の整備イメージ図 宗右衛門町商店街振興組合 ホームページ



【中央区史跡文化事典】に、詳しい解説があります。※本文中にも注釈で案内しています。中央区役所で配付していますので、ぜひ手にとってご覧ください。